

「かば色ってどんな色？」

テングタケ科のキノコは、幼菌の時は地中でヘビの卵のような形をしています。その白い皮（外套膜）を破ってキノコ（子実体）が成長してくるのです。従って、成長したキノコでも、根元に白い袋（ツボ）が残っています。

そんなテングタケ科のキノコの一つに、「カバイロツルタケ」というのがあります。ごく普通に自生している、特に目立った特徴もないキノコです。「ツルタケ」は「鶴茸」の意味で、ツルの首のように細い茎をのぼすということです。問題は「カバイロ」のほうです。



「カバイロツルタケ」

Amanita fulva

秋の雑木林や混交林、それに道端などにも、ごく普通に見られるキノコです。これとは別に、「ツルタケ」という種類もあります。形態はまったく同じですが、ツルタケのほうは、傘の色が濃い灰色です。

（長野県軽井沢町発地）

そもそもカバイロというのはどんな色なのでしょう。「日本古来の色」には「浅葱」「緋」「若草」「群青」など、なかなかいい名前がついたものが多いです。「かばいろ」もその一つです。日本の色に詳しい本で調べたら、「かばいろ」はこんな色とわかりました。

かばいろ

私は、もっと薄く黄色に近い色を想像していたのですが、まったく違いました。一体漢字ではどう書くのでしょうか？実は「かばいろ」にあてる漢字には、2つの説があります。一つは「樺色」。ダケカンバのような広葉樹の樹皮の色、という意味です。そしてもう一つが「蒲色」。これは「ガマの穂」の色、という意味です。「蒲焼き」は、形や色がガマの穂に似ているから、という説があるそうです。どちらもカバイロツルタケの色には似ていないのですが、元の「かばいろ」に近いのは、ガマの穂のほうではないでしょうか。カバイロツルタケは「樺色鶴茸」ではなく、「蒲色鶴茸」のほうが正しいように思います。



「かば色論争」 どうやら軍配は「ガマの穂」にあがったようです。(ジミー・田中 画)

(お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋)